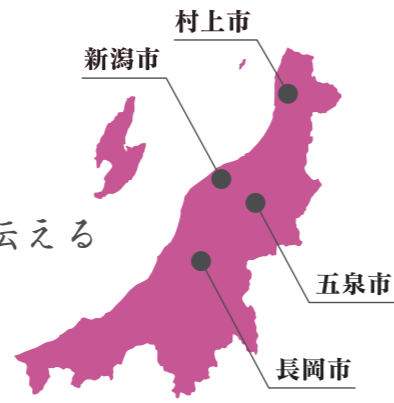


# ふたご

新潟ここだけ物語

想い | つくる | 伝える



[Fuud]  
2026  
春号  
— 季刊 —

# 堀直寄つて誰?



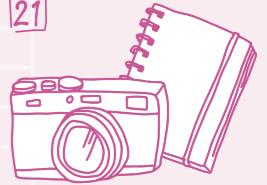
Take Free  
ご自由にお持ちください

江戸初期、蔵王堂藩(長岡藩)の領主になった頃と思われる堀直寄の木像。県内各地で先進的な町づくりを手がけ、大名として充実の時を迎えた直寄の面影が木彫彩色の技術で表現されている。  
長岡市 昌福寺蔵(長岡市郷土史料館寄託) (撮影協力:長岡市郷土史料館)



今回の取材テーマ  
伝説の犬タマ

取材メモ 21



わたべ  
カメラマンの

今回の取材で訪れた五泉市の村松地区。ここは昭和初期、タマという犬が2度、雪崩に遭った人を救った伝説の舞台として知られる。メスの猟犬・タマは昭和9年、狩猟中に雪崩に遭った主人の刈田吉太郎さんを、雪を掘って救い、11年には主人と同行者の2人を救出した。当時この活躍は日本全国と海外にも報道され、今も村松の人にとって郷土の誇りとなっている。

6年前、タマがいた集落を訪ねた。飼われていた家はもう空き地だったが、刈田さんと共にタマに救出された同行者の家がまだあった。住人に話しかけると、なんと救われた人の息子さんと、タマのことも憶えていた。ただ救出劇当時はまだ4歳の子ども、もしタマが助けていなかったら、ずっと父親のいない人生だったわけで、この人にとってもタマは運命の犬だと思った。



地元でタマの物語を後世に伝える活動をしている「忠犬タマ委員会」というグループがある。メンバー3人の案内で、1度目の救出現場である、権現山中腹の「ろうそく岩」という場所に行ることがある。数キロの距離なのに、急峻な沢を登るので、滑って転んでびしょ濡れ、へとへとで辿り着いた。昔の人の「食物を得る執念」を知る体験だった。タマの物語でずっと疑問に思っていたことがある。なぜ一緒にいたタマは雪崩に巻き込まれなかったのだろう。狩猟経験者が教えてくれた。雪が積もると狩猟対象のヤマドリが餌を求めて、雪のない沢に集まる。猟犬がそれを追うと、ヤマドリは習性で沢に沿って下流へ逃げる。猟師は下でそれを迎え撃つので、雪崩に遭う危険性が高くなるとのこと。なるほど! この物語の雪崩シーンを鮮やかにイメージすることができた。

写真、文章/スタジオF(t) 渡部 佳則

- ①村松地区にあるタマの像。新潟県内に7体、神奈川県に1体設置されているという。
- ②急斜面に突き出ているのが、1度目の救出現場「ろうそく岩」。
- ③タマのいた集落とろうそく岩のある山(左)。おおいぬ座のシリウスが夜空に輝く。

## 編集後記

人物伝はどちらかと言えば苦手である。しかし410年前に新潟市の未来を決定づけたキーマンである堀直寄だけは、市民のひとりとして語り継がなくてはと思ってきた。幸いに今号で長年の夢を叶えることができた。でも戦国末期から江戸幕府が安定するまでの激変の時代で、権力の中核に与しながら県内各地の地域経営を主導した人物像はあまりに大きく複雑で、ひ弱な脳力では書ききれないと投げ出したくなった。それでも新潟市、村上市、五泉市村松、長岡市で直寄をよく知る人たちに会い、功績にもかかわらず知られていないもどかしさを共有し、それを励みになんとかふうど流の人物伝に仕上がったようだ。ともかく直寄は優れた才覚をもつ先進的な実務家だった。徳川家康が亡くなる寸前に後事を託したほど有能な人物だった。もし、それほどの人物の存在を実感したいなら、ぜひ村上市を訪れてほしい。市内の至るところで直寄が喜んで迎えてくれるだろう。(渋谷川)

## ふうど 2026春号 vol.72

企画編集 ふうど編集室  
発行人 高橋 佑  
取材編集 渋谷川綾子  
田巻 悠  
写真 渡部佳則  
デザイン 斎藤道司  
題字 小林 翠

## 発行所

株式会社 **たかよし** ふうど 編集室

SUSTAINABLE GOALS DEVELOPMENT 私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800  
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884  
■上越営業所 / 〒943-0805 新潟県上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階2 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 520-7049  
■東北営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目3-47 上杉オオクワビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712  
■東海・関西営業所 / 〒464-0025 愛知県名古屋市中千種区桜が丘295番地 第8オオタビル7階 TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081  
■オフィシャルサイト / <https://www.takayoshi.co.jp>

## 「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、NST、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みなと工務、朱鷺メッセ、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市立中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandal、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、りゅうとびあ新潟市民芸術文化会館 <東区>新潟空港、パティスリーカフェオールアン <西区>新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟荘 <南区>新潟市農業活性化研究センター <北区>新潟せんべい王国、ビュー福島湯、湯川公民館 <江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館<西蒲区>カーブツッチ、ドーム・シヨオ <秋葉区>カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館、むらさき呉服店  
【新潟市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新潟市生涯学習センター、新潟市民文化会館、新潟市立図書館、豊浦地区公民館、ホテル華風 【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん 【五泉市】ラポルテ五泉  
【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会 【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまこし復興交流館おらた 【燕 市】分水ビジターサービスセンター 【加茂市】穂の家  
【出雲崎町】越後出雲崎天領の里 【十日町市】十日町市観光協会、十日町市博物館 【南魚沼市】榎苑  
【上越市】上越観光コンベンション協会、上越市立水族博物館うみがたり、上越あるるん村  
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館  
【東京都】<千代田区>新潟市東京事務所  
本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。



針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

日本が大きく変わろうとした戦国末期から江戸初期、新潟に、すごい武将がいた。強大な武力を誇る上杉家と対峙し、領地が替わるごとに、大規模な都市づくりをした堀直寄（なほより）である。南魚沼、長岡、新潟村上では直寄時代の都市計画が町の原型になっている。しかしその功績や硬軟あわせもつ人間の魅力は、あまり知られていない。今年で没後三八七年。新潟発展の恩人のひとり、直寄の心を探す旅にでた。

# すごいね直寄さん

想い 越後に尽くす

## 都市開発の天才

堀直寄（なほより）は地域のポテンシャルを見つめる天才だ。

四一〇年前はじめて直寄が新潟の浜辺を視察した時の想いを探ってみる。

海のように広い信濃川河口にか細く伸びる三角の砂丘地に、半農半漁の村と湊の地の利を活かした商いをする町が見える。その人の営みの群れは、日本海からの強風に押され川沿いに寄せている。北陸の最果ての地、新潟には京都や大坂の賑わいとは程遠い荒涼とした風景が広がっていた。

しかし直寄は、そこに海外貿易まで視野にいれた地域資源を見つけて。凡人には寒々と映る風景でも、領民のために熟考する直寄は、目の前

にある寂し気な新潟を全国屈指の湊町にしようと考えた。

さあ、それからの行動は速く、湊の交流機能をもつ都市づくりが急ピッチで進む。新しく町の区画をふやし、開発したエリアへの住民の一斉移転をやや強引に行う。領民たちは新しいお殿様の命令を受け、さぞ大騒ぎだったろう。

だが、その一方で前例のない政策を打ちだす。それは商業活動に関わる種々の税を免除するという、大胆な政策だった。さらに町の自治は住民に任された。こうして自由で税金がかからない新潟が、全国の商人たちの間で注目され、新潟は湊の商業都市として歩み始める。なんと思いついた政策なのか。新潟のスタートアップをした直寄とは、いったい、どんな人なのか。その生涯を駆け足でたどってみる。

## 四回の領地替え

生まれは美濃国茜部（あかぬべ）（岐阜県大垣市）。父は戦国の真つ只中を生きぬいてきた堀家の重鎮・堀直政。母は美貌で知られた妙泉院。多感な時期を豊臣秀吉の小姓として過ごし、大陸侵攻の前進基地・肥前（佐賀県）の名護屋城に着陣し、未知なる大陸をめざし若き血をたぎらせている。

そして一五九八年（慶長三）、まったく地縁のない越後に堀家の家臣として家族揃って越後入りした。長く越後を支配していた上杉家が会津に移り、その跡を越前北庄の堀家が継いだのだ。この時、直寄は二万石の領地を与えられ坂戸城（南魚沼）の城主となる。当時二十二歳。秀吉の元を離れ、思う存分に手腕を発揮できる新天地に降りたのだ。領主になるや時代遅れの山城・坂戸城に替わる防衛的な居館を平場に移し、領民の生活向上をめざす新田開発や特産物の生産などを奨励する。

しかし、ここで堀家に降りかかる大事件が発生。上杉家の遺恨を抱えた会津軍が、治世が始まったばかりの越後に攻め込んできたのだ。徳川家康の会津攻めを発端にした関ヶ原の戦いと、同時に起きた上杉遺民一揆である。これを天下の反逆とみなした家康の命を受け、直寄たち堀一族と与力の村上氏と溝口氏は巧み

な上杉勢を制圧。これを契機に直寄は家康と信頼関係を築いていく。

坂戸城主だった十二年の間、堀家の当主が居城する春日山城に替わる、大規模な福嶋城の築城と城下町づくりを父の指揮下で成しとげる。それと並行し中越の戦略拠点・蔵王堂城に替わる長岡城の縄張りとし新しい都市計画を構想。こうして新しい領地に慣れ、堀家の治世が本格的に始まろうとしていた頃、一族の要だった父の直政が逝去。すると直寄と兄の直知との間で争いが起き、将軍らが立ち会うほどのお家騒動に発展。その結果、三十二万石の大大名、堀家は断絶。直寄の初にして生涯最大の挫折だった。

しかし上杉家との戦いで武功などが家康に認められ、信州飯山藩の城主になり、三十四歳にして独立大名に出世。そして直寄が飛躍するチャンスが到来！国内を二分して戦った大坂冬の陣と夏の陣に出陣し、その戦功により八万石を与えられ長岡の地を踏むことになる。在任期間は短かったが、以前計画していた長岡城の築城工事を再開するとともに、長岡藩領だった新潟で前述の

生まで配慮されているなら、みんなが喜び勇んで工事に参加しただろう。

なんと人づかいが上手いのか。当時の城づくりなどの工事は、領民が義務として駆りだされるのが一般的。なぜ前例のない発想ができたのか。直寄に詳しい新潟市歴史博物館の学芸員、田嶋悠佑さんは「戦いの時代から平和な時代になると、それまでの制度や慣習が通用しなくなりました。そうした時代背景のなかで直寄さんは、柔軟に発想を転換し前例にとらわれない独自の政策を打ちだしました。その柔軟な考え方は、堀家の重鎮で秀吉から（天下の三陪臣）と讃えられた父の影響が強かったと思います。堀家は織田信長・豊臣秀吉の家臣団に属し、父親は京都に長く任んでいました。当時の京都は日本の政治文化の先進地でしたから、幼い直寄は自然に時代感覚を身につけたのでしょ」と説明する。

なお直寄の『寄』は本来（珍しい・凡庸ではない）（村松町史）という意味の『奇』を使い、名は体を表しているともいう。\*

## 村上に帰りたい

ところで、直寄はかなり見栄っ張り、それにより大きな借財を背負い苦しんでいたことが資料から散見されるが、なぜだろうか？

「大坂の陣に出兵したことや、小大名にしては分不相応な規模の家臣団

を持ったこと、秀忠・家光と二代にわた

り將軍を江戸の自邸に招いたことなどが借財の原因とされています。なぜ借財をつくるほど無理をしたのか。「堀家の家老の次男として生まれた直寄さんは、決して恵まれた出自ではないのですが、ほとんど出世し家康や秀忠に頼りにされています。その一方でもともとは秀吉側についていた外様大名ですから、少しの間違いで改易されたりお家断絶の可能性がありました。そのため徳川家に対し必要以上に忠誠心を示そうとしたのでは」と思いますが、それほど直寄さんは、常に緊張を強いられる立場にありました。なるほど凄腕の大名に見えたが、内面ではいつも不確実性という見えない敵と闘っていたのか。辛いな。大名も大変だったのだ。田嶋さんは直寄を（叩き上げのワゴン社長（江戸版田中角栄））とたとえ、最後に「新潟の人は直寄が家康に

気いられ後事を託されたとか、上野寛永寺に大仏堂を寄進したなど、とかく江戸での活躍に注目しがちです。でもほんとうは国元のことを心配し家臣に宛てて事細かな指示を書いた手紙を頻繁に送っています。晩年には（村上に帰りたいけど、江戸に仕事があり帰れない）という手紙を送っています。直寄が地元への振興のため尽くしていたことに、もっと注目してほしい」と手紙から見える直寄の心を代弁してくれた。それでは、いざっ村上市へ。リアルな直寄を見にいこう。



長岡市の蔵王堂城址にたつ勇敢な武将姿の堀直寄。



直寄の村上移封後、新潟町は長岡藩主牧野忠成により湊町づくりが継続し、現在の政令市新潟の基礎になった。

ように湊町づくりを行った。

## 独創的な発想

直寄の領民を思いやるエピソードがある。長岡城築城工事の時のことである。多くの人手を要する城づくりには領民の協力が必要だった。そこで直寄が考えた秘策は、庶民の心をそそる魅力的な労働条件だった。男女を問わず賃金を米で払い、仕事終わりにどんぶり一杯のお酒とニシンの煮染めを配るといってお触れを出し人集めをしている。庶民にとってお酒は高級品。さらにお酒のアテまでついでく。午前午後の二回の休憩時間まで明示されていた。こんな手厚い福利厚

\*堀直寄の「寄」は古来より「奇」を用いているが、小誌では常用漢字の「寄」で統一している。

村松藩主が着用したと伝わる甲冑と兜。兜の上部には堀家の「釘抜き」の紋がついている。（撮影協力：五泉市村松郷土資料館）

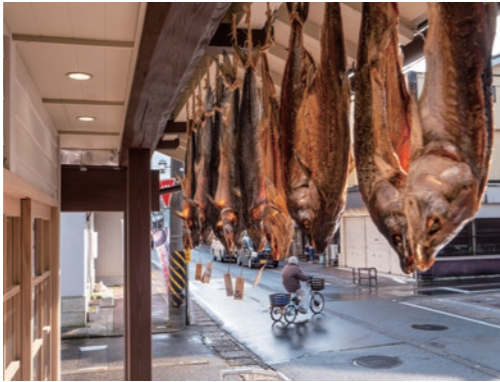
毎年7月6・7日に開催される村上大祭。豪華絢爛なおしゃぎり屋台が軽快なお囃子とともに町中を巡行する。この屋台行事は令和7年12月にユネスコ無形文化遺産に登録された。(提供:村上市)



直寄は漆木栽培を奨励。後に堆朱工芸が盛んになる。



町のなかで突然現れた防衛用の土塁。江戸時代は堀と土塁で町全体が囲まれていた。



さまざまな鮭の加工法で知られる「鮭の町・村上」の始まりは、直寄の鮭の捕獲制限にあった。



臥牛山山頂に築かれた村上城跡の石垣。堀直寄の時代に大規模な石垣が築かれた。そこから歴代の城主が見た村上市街と日本海が一望できる。

# 村上藩のイノベーション

つくる 非凡な愛の証し

## 死しても守ろうぞ

県の北端にある村上市は、堀直寄が二十一年の間、慈しみ育てた直寄愛着の町である。いったい、どんな町づくりをしたのだろうか。堀家の断絶後、何度も領主が交替し町のカタチは変化したかもしれない。はたして四百年前の直寄を見つめられるだろうか。

はじめに直寄のお墓を探してみる。かつて村上城三の丸だった場所に、広大な敷地をもつ光徳寺がある。村上藩歴代藩主の菩提寺で、とくに江戸中期から明治までの藩主内藤家の墓は、東京から移した一族の多くの墓とともに黒塚で仕切られたエリアで守られている。そこから臥牛山の麓を登っていくと、墓園のほぼ中央に、遠目でも不思議な形の墓が目をかすめた。大きさも形も、ほかの墓と全く違う。まさか、そんな一等地に昔むかしの領主の墓があるだろうか。半信半疑で近づいてみると、それは、まさしく直寄の墓だった。大きな球体の石に法名が刻まれているだけで、装飾はない。墓石の表

面の多くは苔に覆われ、球の中心に深い亀裂が走り、古色を帯びていた。そしてあたりを見回すと墓は村上城本城の真下にあることに気づく。そこには死んでも町を守ろうとする直寄がいた。いや直寄の遺志を見たというべきか。真っ直ぐに天を突く松林の静寂のなかで、そこだけが強烈なエネルギーを放っていた。それは文献で知る直寄像をはるかに超える圧倒的な存在感だった。

光徳寺は、もともとは直寄が堀家の菩提寺として創建した曹洞宗の英林寺だった。が、藩主の交替とともに宗派や名前が変わったことを後々知る。えっ、それって凄いです。つまりお墓やあたりのロケーションは直寄が都市づくりをした当時のままだった！とすれば、お墓のある場所こそ直寄の原点。聖地とも言っているほどの場所だったのだ。

## 合理的な人

そんな予備知識もなく、いきなり出会った直寄に興奮し、その勢いでおしゃぎり会館(村上市郷土資料館)で突撃取材をする。会館の

ロビーでは海外の旅行客数人が憩い、インバウンド政策の浸透を見せていた。

突然の訪問にもかかわらず分厚い資料を手にした当時館長の建部昌文さんが、にこやかに直寄について語りだす。「とにかく凄いなですね。長岡城、新潟湊、村上城など領地が替わるたびに大規模な都市づくりを行い、その後の地域発展の基礎を造っています。村上の場合、戦国時代初期に築かれたとされる中世城郭の村上城を近世城郭に変貌させました」。その背景について「ここは地政学的に、北側に五十七万石の山形藩、東側には三十万石の米沢藩に囲まれていました。いずれも有力な外様大名です。ですから村上には北越後を守る重要な戦略拠点でした。直寄が村上の領主になった時代は、まだ天下が完全に安定していない頃でしたから、城の守りを厳重にする必要があったのです」と建部さんが解説してくる。そうか、だからほかの地域では見られない、城と町の全体を堀と土塁の二重に囲む堅固な城郭都市をつくったのか。

それにしても標高一三五メートルの山頂にある城の築城工事は、大変だったのでは?「築城するに

あたり、直寄は最初に町中を巡る総堀を作り、その堀を通じ石垣にする石を運んでいます。石は十キロほど離れた笹川流れの柏尾で採石しました。そこから海路で瀬波の湊まで運び、三面川を上り、さらに堀を通じて村上城の上り口で陸揚され、轆轤などの引き揚げ具で山頂に運びあげられました。こうした作業手順はすべて直寄が考えた指示によるものです。この点から見ても、直寄は合理的な精神の持ち主だったことが分かります」。

へえ、そんな現場の細かいこともシミュレーションしていたのか。資料によれば石を引き揚げる現場に立ち会い、領民たちが怪我をしないように冗談まじりで注意していたという。

もっと凄いことが。「築城工を手伝った町民は、地子(固定資産税)を永代免除されています」。さすが直寄さん!過酷な肉体労働のかわりに、ちゃんとその報奨を用意していた。ここ村上でも領民目線で前例のないことをしていたのだ。この方策は城づくりに参加したという、町民のプライドにもつながっていったらう。

なお村上城跡は国指定史跡に登録されている。これも直寄の類い稀な才能を示す証拠だろう。ちなみに上杉謙信の居城、春日山城跡も国の文化財。かつて戦火を交え

た上杉家と直寄の城が時を超え同格に並んだ。しかも家格も所領も上杉の方がダントツ上なのに、文化的価値という点で同等なのだ。

## すべての始点は直寄

建部さんの話は、まだまだ続く。

「いまの村上市の町割りの大半は、ほぼ江戸時代のままです。直寄の時代に計画した町が四百年近くそのまま続いています。車社会になり多少の道路変更はありますが、武家の居住区、寺町、商人町は昔のままです。当時の都市計画に不都合がないということ、直寄の先見性と合理性を物語っています。直寄が遺したギフトは、それだけではない。「村上大祭の始まりは村上城を築いた時、臥牛山の中腹にあった村上の総鎮守・羽黒神社を城から見下ろすのは畏れ多いとして、直寄は一六三三年(寛永十)に現在の場所に社殿を移しました。その遷座の御巡幸の際、町民が築城工事で使用した車を借り太鼓を打ち鳴らし祭りを盛り上げたことが始まりとされています」。そのほか卵をもつ鮭の捕獲禁止、二つの伝来説はあるが茶の栽培の導入、漆木の栽培奨励など、現在につづく村上特有の伝統産業の基礎を作っていたのだ。さらに沼鉦山の開発、新田開発、防風対策として菜菔(ダイダイ)の木を植林など政策は多

岐にわたる。

こうした政策は、江戸にいる直寄の指示を受け、城代の野瀬右近はじめ堀主水、堀主膳などの重臣たちが村上で推進している。非凡な主君を支えた家臣団も、また非凡な人たちなのだ。

## 突如あらわれた江戸

建部さんから直寄時代の遺構が町の中に二ヶ所あると聞き、資料館の帰りに寄る。

藤基神社の社殿を守るように、二階建住宅をゆうに超える高さで、土塁が続いていた。それは人が簡単に登れる高さではない。その脇は住宅街。町のまん中にも直寄の功績をリアルに物語る巨大な構造物があったのだ。江戸時代は、それと同じ規模の土塁が町を囲んでいた。ここで、ようやく直寄が行った都市づくりのスケール感を体感した。もう一ヶ所、船で運ばれてきた石などの資材を陸揚げするため、に設けられた下渡門跡に行く。確かに段丘の地形を活かした堀らしきものがあったが、あまりに広すぎて全容を掴めなかった。とにかくデカイのだ。

市内のあちこちでリアルな直寄を見つけた。何もかもが想像以上のスケールで、ただ驚き、ただ唸るだけの春の一日だった。



全面に堀家の「釘抜き」紋が蒔絵でほどこされている重箱。(撮影協力:五泉市村松郷土資料館)



御影石の巨大な球体に法名と生前の名前が刻まれている堀直寄の墓。全国に3基あるうちの一つ。(五泉市村松の英林寺)

インフォメーション

**新潟市歴史博物館みなとびあ**  
〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
TEL 025-225-6111

**おしゃぎり会館(村上市郷土資料館)**  
〒958-0837 村上市三之町7-9  
TEL 0254-52-1347

**新潟県立歴史博物館**  
〒940-2035 長岡市関原町1丁目字権現堂2247番2  
TEL 0258-47-6130

**村松お城の会**  
代表: 瀧澤 修  
TEL 0250-58-7191

読者の声 ~前号を読んで~

**味噌漬けの思い出**

「きりあい」という名前は先号で初めて知りました。我が家でも私が中学生の頃まで味噌を作っていて、大きな味噌樽が3~4個あり、家で採れたさまざまな野菜を漬け込んでいました。それらを小樽に移し替え必要に応じて食べていました。もちろん大根を細かく刻んだものも。時にはそれをご飯にまぶした御握りを食べた思い出があります。  
(長岡市 70代男性)

令和7年まで開催されてきた直寄公没後二百年記念の際に行われた住吉行列の絵巻をもとに再現した「村松藩 巡行絵巻行列」。(提供:五泉市観光協会)



十二代続いた。村松は越後平野の東端から阿賀の山々で行き止まりになる地域にあり、梅と桜がきれいな村松城跡公園は、村松藩の城があった場所である。市街地の道路は、ところどころで敵の侵入を防ぐクランク状に曲がり、そこがかつて城下町であったことを思いだす。県内でややマイナーな直寄だが、村松では名が知られ、どこよりも顕彰活動が盛んな町とされている。藩士の子孫らが集う『松城会』や、歴史を再発見し地域の誇りにつなげる活動をする会がある。また直寄が死去した時にたてられた墓が、二十年ほど前、東京から移ってきている。その墓は英林寺にあり、毎年、命日には有志による『鏡團公忌』が営まれ、今年も六月二十四日

午前十時に予定されている。こうした直寄を慕う柔らかい心を肌で感じることができる町なのだ。戊辰戦争で焼失した村松城の研究から始まったグループ『村松お城の会』の代表、瀧澤修さんに話を伺った。「堀直寄は江戸中期の政治家、新井白石が著した藩翰譜(はんくわんぷ)でへもう少し早く生まれていれば天下をとれた」と評価したほど優秀な人です。でも直寄が町の骨格をつくった新潟市や長岡市では、他の歴史的な事件に隠れて語られることは少ないです。ここ村松では、直寄の血筋と堀家の治世を支えたチームの血脈が続いています。その歴史を可視化できる城の平面図の作成や、村松藩のふるまい料理の再現などを行い、それらを通して藩主の親である直寄の功績が未来に伝わることを願っています。実際に瀧澤さんの口から次々に旧藩士の肩書きがこぼれ、あらためて江戸と地続きであることを実感する。確か直寄の研究書『堀鐵園公記』は村松の人が著していた。一著者の片

桐道(とうどう)字は、村松藩のご典医の子孫で、町長を務めるなど地域振興に尽くし、晩年に直寄の事績を調べあげた郷土史の先駆的存在です。また城の平面図を起こした野口政昭さんも江戸家老の血筋で、県の土木行政を率いたひとりです。野口さんの技術的な知見があったからこそ精密な図面が完成し、後世の私たちは当時の城に想いを馳せることができます。可能かどうかは別として、この図面をもとに城をつくれますよ」と瀧澤さんは大きな城の平面図を広げながら先人たちの功績を讃える。そして村松藩ならではの伝統食について話がおよぶ。「全国のどの藩でも共通して行われた行事ですが、藩では正月に家臣が城に行き新年を祝う行事がありました。その時にお殿様から、ふろふき大根が振る舞われたのです。太い大根を長さ五センチくらいに輪切りにし、片方だけ斜めに切り、その断面を馬蹄形に見立てるのが堀家の流儀でした。いまでも藩主や家臣を先祖にもつ人たちの集まりには、決まっ



「村松お城の会」の瀧澤修さん。殿様も食べたと言われる村松藩のお膳料理を再現した経験をもつ。

て、ふろふき大根が出ますね」。わあ、そうなの。なら直寄も食べていた!というより直寄の発案かも。対外的に派手に見られる直寄だが、意外に質素。それとも何かの戒めなのか。いづれにしても堀家のアイデンティティを確認する一品に違いない。これも嬉しい発見だった。ともあれ、あまりにも凄すぎた堀直寄の心を探す旅は、庶民的なふろふき大根の話でひとまず終わる。スキルも人格も凡人には遥かに及ばない大名に、少しだけ近づいた気がする。これほどの人物が短い期間であって、新潟と深く関わったことをもっと自慢していい。とくに政令市新潟の場合、大恩人なのだから。



寛永13年(1636)、還暦の記念に狩野探幽によって描かれた堀直寄の肖像画。(提供:新潟県立歴史博物館)

村上から戻りしばらくしたある日、嬉しいニュースが飛び込んできた。晩年の堀直寄を描いた肖像画が、新潟県指定文化財に登録が決定したという。取材中に何度か写真で見ているが、書画骨董に疎いものには、価値がよく分からなかった。左の写真がそれである。この絵は直寄の次男・直時が村上藩領の一部を分地されて立藩した村松藩に、始祖の『御寿影』として代々伝えられてきたもので、現在、新潟県立歴史博物館に所蔵されている。学芸員の渡部浩二さんに、絵の文化的価値などを解説してもらおう。「直寄が活躍した江戸初期は、大名の入れ替わりが激しく、史料も少ない

京都でも大きな寺院である。渡部さんの解説から、またまた直寄の桁外れなスケールを見せつけられた。そして描かれている内容から「琵琶を抱え、右膝の横に愛用の朱鞘の太刀と尺八が置かれて

います。直寄は琵琶や尺八の愛好家で、天下の名品を複数所有するコレクターでもありました。地域の発展のために力を尽くすだけでなく、文化面でもレベルが高かったことを、この肖像画が物語っています」と続ける。そっか、この一枚の絵にはいろんな情報がつまっていたのか。ところで、なぜ有名な大徳寺の高僧が筆を執ったのか。そこには直寄の本質が見える反骨のストーリーが隠されていた。五泉市村松にある堀家の菩提寺、英林寺の関谷正中さんが上田史談会発行『魚沼』に寄稿した記述を参考に直寄の心情を推理してみよう。仏教を深く信仰していた直寄は、朝廷と幕府が争った紫衣事件に巻き込まれた沢庵を全面的に擁護した。沢庵は仏教界のトップクラスの寺院、大徳寺の住職である。各方面への嘆願も虚しく、沢庵は罪に問われ出羽国上山(山形県上市市)に配流された。そして旅立ちの時、幕府の目を憚りわずかに数名だけの見送り人しかいなかった。その寂しい門出のシーンのなかに直寄がいた。さらに遠い北国での生活を按じ、直寄は手紙を送っている。やがて恩赦で放免されるや、沢庵を江戸駒込の別邸に住ませ二年ほど世話をしている。この間に二人は友情を育んだ。こうした経緯で大徳寺の高僧たち

が直寄のために筆を執ったのである。しかし終生、徳川家に率先して忠誠を尽くしてきた直寄が、なぜ自分の立場を揺るがしかねない反体制的な行動をとったのか。関谷さんも、ここに注目している。幕府の理不尽な弾圧が直寄にはどうしても許せなかった。その事件に外様大名として薄氷を踏む思いで過ごしてきた我が身の苦勞を重ねたのか。一方、出自による見えない格差を感じてきた直寄は、誰よりも人の心の痛みに敏感だっただろう。その情が領民のための地域づくりに励む原点になり、大坂の陣で命を捧げた多くの無名の人を供養する大仏堂を寄進する原動力になった。そして、その大きな人類愛が沢庵と直寄を結ぶ絆になったのだろう。きつと天国にいる直寄と沢庵は苦笑しているだろうが、現時点ではそうとは思えない。なお、この肖像画が描かれた三年後、直寄は江戸で病死する。享年六十三歳。授けられた法号は『鐵團宗釘』と厳しい。が、戦国の世を自らの肉体を突き通すように苛烈に生きた男にふさわしい法名である。もちろん命名は沢庵である。

**直寄とふるふき大根**

この激しい気質を受け継いだ直寄が治めたのが村松藩三万石である。初代藩主堀直時から、明治初頭まで

『堀直寄の系譜—権谷藩と村松藩—』(仮称)  
会期: 令和8年9月19日(土)~11月3日(火・祝) 会場: 新潟県立歴史博物館

もうひとつの遺産

伝える 外様大名の美学

肖像画を読む

村上から戻りしばらくしたある日、嬉しいニュースが飛び込んできた。

晩年の堀直寄を描いた肖像画が、新潟県指定文化財に登録が決定したという。

取材中に何度か写真で見ているが、書画骨董に疎いものには、価値がよく分からなかった。左の写真がそれである。

この絵は直寄の次男・直時が村上藩領の一部を分地されて立藩した村松藩に、始祖の『御寿影』として代々伝えられてきたもので、現在、新潟県立歴史博物館に所蔵されている。学芸員の渡部浩二さんに、絵の文化的価値などを解説してもらおう。「直寄が活躍した江戸初期は、大名の入れ替わりが激しく、史料も少ない

そのため、彼らの実像を掴むのは難しいです。ただ県内各地に遺した功績などから、直寄が時代の荒波のなかを生きぬいた(傑出した大名)であることは認識されていました。それを明確に裏づけるのが、この絵なのです。直寄が村上藩主だった時に還暦を迎え、その記念に描かれたものです。それを描いたのが、幕府の御用絵師の狩野探幽なのです!えっ!あの二条城のピカピカの障壁画を描いた狩野派のリーダーですか?」そうです。絵師の落款から探幽が描いたことが判明しています。探幽の絵である事自体が貴重ですが、それに加えて賛(人物を称える漢文)を京都大徳寺の三人の高僧が書いていることが史料的な価値を高めています。これだけ当代一流の文化人が越後の一大名のために筆を執るということは、相当に力がないとできないことです」。ちなみに大徳寺は歴代の天皇や秀吉などが崇敬した

反骨の直寄

ところで、なぜ有名な大徳寺の高僧が筆を執ったのか。そこには直寄の本質が見える反骨のストーリーが隠されていた。五泉市村松にある堀家の菩提寺、英林寺の関谷正中さんが上田史談会発行『魚沼』に寄稿した記述を参考に直寄の心情を推理してみよう。仏教を深く信仰していた直寄は、朝廷と幕府が争った紫衣事件に巻き込まれた沢庵を全面的に擁護した。沢庵は仏教界のトップクラスの寺院、大徳寺の住職である。各方面への嘆願も虚しく、沢庵は罪に問われ出羽国上山(山形県上市市)に配流された。そして旅立ちの時、幕府の目を憚りわずかに数名だけの見送り人しかいなかった。その寂しい門出のシーンのなかに直寄がいた。さらに遠い北国での生活を按じ、直寄は手紙を送っている。やがて恩赦で放免されるや、沢庵を江戸駒込の別邸に住ませ二年ほど世話をしている。この間に二人は友情を育んだ。こうした経緯で大徳寺の高僧たち